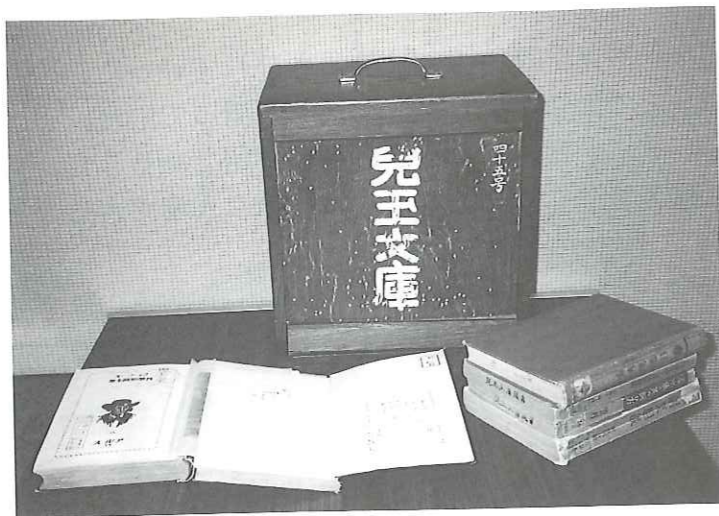


した。この制度は昭和21年の学制改革まで、長く続いた。

児玉文庫



児玉文庫蔵書と貸出箱

児玉文庫は、明治36年1月23日、徳山町本丁（現児玉町）に誕生した私立図書館である。

当時、軍人また政治家として中央で活躍していた児玉源太郎（1852-1906）が、人手に渡ってしまっていた児玉家伝来の土地を買い戻し、その地に建設したものである。同文庫の初期の蔵書は、有志からの寄贈と旧徳山藩校興讓館の蔵書であったものから成り、約8,000冊であった。

拡張また改造されながら、徳山の文化の拠点として発展し、昭和16年、その蔵書は約42,000冊となったが、同20年7月26日、空襲により焼失してしまった。

徳山ゆかりの人々

私立徳山女学校と鉄幹（1873-1935）

鉄幹は明治22年17歳から20歳まで、兄照幢の経営する私立徳山女学校の国語・漢文の教師を勤めた。同31年に父礼巖が徳山の徳応寺で死去したときは、その喪主をつとめた。

明治の国際人浅田栄次（1865-1914）

慶応元年、徳山藩士浅田平作の長男として今の川端町に生まれる。明治8年に岐陽小学を卒業。その後同20年に今の東京大学に入学したが、翌21年アメリカに留学し、同26年にシカゴ大学大学院で最初の博士号を授与された。

帰国後は、青山学院等の教授を経て、同32年に東京外語学校の英語科主任教授となる。わが国の英語教育界の先駆者として、その発展に尽力した。49歳で没。図書館内に「浅田栄次資料コーナー」がある。浅田博士の自筆の資料を中心に、マイクロフィルム化してシカゴ大学と徳山に永久保存できるように準備が進められている。

工都徳山の基礎を築いた野村恒造（1850-1920）

野村恒造は、性格は温厚にして高潔で若いころから公共事業に尽くして、全く私利私欲の無い人だったという。明治22年に名誉村長に選ばれてから、4期にわたって町村長を務め、過渡期の徳山発展に尽力した。

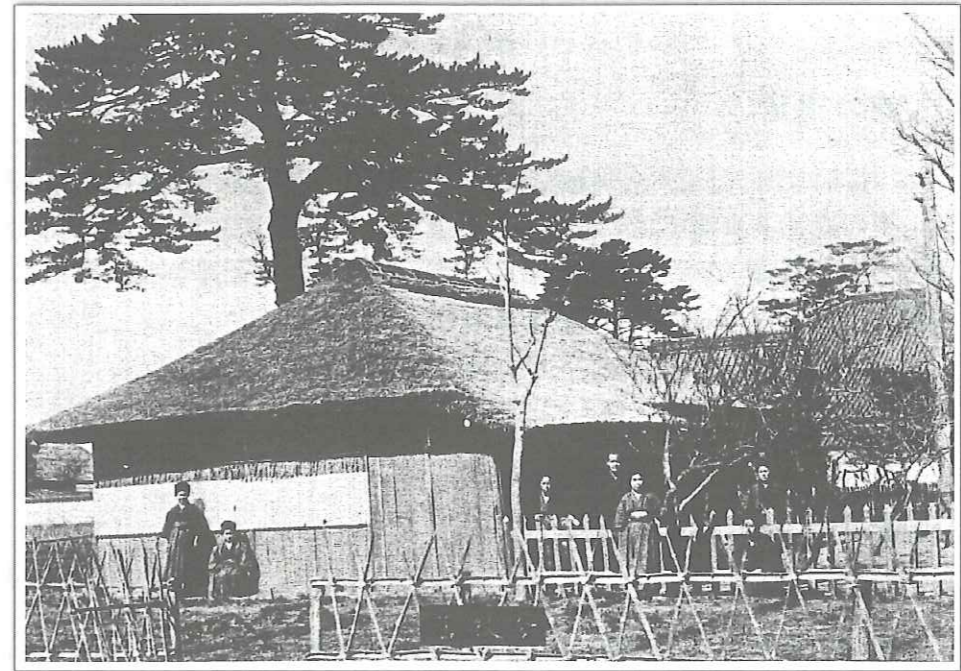
町長から貴族院・衆議院議員に当選し、その間山陽鉄道の開通をはじめ、海軍練炭製造所の誘致等、不景気に喘いでいた町政に活気を与え、工都徳山の基礎を築いた。

女子教育の先駆者赤松安子（1865-1913）

赤松安子は、徳応寺住職の赤松連城の長女で、京都の願成寺住職与謝野照幢と結婚した。安子は夫照幢とともに、山口県積善会・徳山婦人講習会をつくって、特に婦人

の教育に力をそそいだ。さらに、講習会を拡張して教学院跡に私立白蓮女学校を設立し、同校内に防長婦人相愛会をつくって、地方における慈善事業の道を開いた。

明治23年に白蓮女学校を私立徳山女学校と改め、同27年には卒業生と在校生による金蘭会を創設した。32年には、婦人相愛会育児所を設け、特に女囚の乳児を主とした孤児など20数名を保育した。ついで34年には、附属幼稚園を開設し、また附属の農園・養蚕・染色・機業の実習科をつくり、女子教育の充実に努めた。



私立徳山女学校 旧校舎

大正期の徳山（1912年-1925年）

1 電灯灯る

行灯からランプへ

大正元年9月に徳山瓦斯株式会社が創設せられ、町内の配管工事の整った翌2年5月29日の夜に一斉に点灯された。料金は1キロ当たり25銭、普通の家庭用メーターのほかに料理屋用の現金メーターがあって、10銭入れると灯が点くようになっていた。料亭松政で食事中に灯が消えて、金も切れて、金を入れるのも忘れて大騒ぎになったという話もある。

ランプから電灯へ

大正5年10月、徳山瓦斯株式会社は都濃電気株式会社に譲渡され、本格的に電気事業が押し進められることになった。やがて都濃電気が山陽電気に買収され、翌年6月には配電線の架設も終わり、徳山町内には瓦斯灯に代わって電灯が灯り、一段と活気を増した。